

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	とかげ：創作
Author(s)	藤田， 忠
Citation	龍南， 2 3 1： 3 7 - 4 6
Issue date	1935-06-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7271
Right	

ど
か
け

藤 田 忠

「霞んでるね」とよく云はれる此の頃の春夫だった。自分は昔からこんな性質なんだ、朗らかに装ふのは本當の自分の姿ぢやないんだ、こんな霞んだ様に見える状態が自分の最も相應しい時なんだ、と心の中で繰り返し見つゝ夢遊病者の様に力無く歩いて居た。舗道の上は最早眞夏の様に熱くて、額からは汗が滲み出る程であつたが、拭ひもせず歩き續けた。

「お前の様な惡魔的な奴とは絶交だ」と云はれた言葉が彼の頭の中に重い鉛の様に激んで居た。惡魔的だと言ふ意味は自分が童貞を失つた淫らな奴だと言ふ意味であらう童貞が無いと言ふ事が唾棄し度い程の嫌惡を感じさせたのであらう、女を幾人も作つて、戀愛許りして居る自分が、男性の恥辱の様に思へたのであらう、春夫は下向いて歩き乍らそんな事を考へて居た。社會と言ふものを知らぬKには自分がそんなに醜く思はれるのであらうか、Kにしたつても少し廣い交際を持つて、世の中を凝視したら、こんな事が何もさう嫌惡すべき事ではない事が分るであらうに、之位の事をさも不道德の様に看做して居たんではとても世の中は過せまいKは哲學に許り凝つて居るが、自分には哲學は概念の遊戲の様に思へてならない、人生の若痛や醜惡を逃避して高尚なる遊戲に耽らうとして居る様に思はれる。總べての科學の基礎が誤つて居るとしたら、自分達は間違つた科學を學んで居るのではないか、例へば數學に於ける根本の土臺となる公理が誤つて居たら、其の上に築き上げられてる高層の數學は全然間違ひになるではないか、二つの平行線が交はらな

いと云ふ公理が間違つて居るとしたら何うだ、總べての科學がそんな風に基礎に於て間違つて居るとしたら……そんな事を考へると勉強するのが馬鹿々々しくなる——昨日もKはこんな事を云つて居たが、春夫には夫が皆嘘の様に思へた、彼が好んでそんな問題を考へ出して喜んで居るのであつて、心の底からその問題に苦しんで居るのではなく、そんな問題を拾ひ上げた事に誇りを感じて、さて之を何う處置しようかと掌にのせた果物を涎を垂らして兩唇を舐め廻して居る様に思へた。何も知らぬ子供が食物のみに夢中になつて居る様に賤しい事の様に思はれるのだつた。

五月も終りに近い頃なので、新緑が若い女達を著しく綺麗にして居る。春夫は女の薄い春のショールを掛けたのが好きだつた。郊外電車が氣持よく走つてゐたつけ、武藏野とはこんな所であらうかと思はれる櫛や櫟の雑木林が続いて黄色い萱等が低い起伏をなした丘に一面に生えて居る。その中を春夫達を乗せた電車は勢よく北へ走つて居た。煙草をふかし乍ら春夫はづつと前に乗つて居る若い女の薄いショールを眺めて居た。薄着をした女の着物が輕やかに其の身に着いて、清々しい雰圍氣を作つて居た。小さい女の子が二人寄りそつて坐つてゐた。ベレー帽の下に流れ出たおかつぽが時々風に揺られて眼の前に来ると可愛いゝ指でそれを拂ひのけて居た。——春休みに見た女の事を心に思ひ浮べて歩いて居るのだつた。此の頃はもうあんなショールを掛けて居るものもない様だ。その代りに通りには喧嘩し度さうな中学生がよく見受けられた。

經驗は神の如しと言ふ。經驗もしないで食はず嫌ひのKは間違つて居るのではなからうか、戀愛をした事のないKには戀愛をする事夫自身が不道徳に見えるでもあらうが、戀愛が人間に與へられた本能の一つである以上戀愛はさう白眼視す可きものではなからう。若し人間に戀愛が無かつたら何うなるであらうか。何よりもKが戀愛を一度して見ればいゝんだ。——電車に乗つてからも春夫はKの事を考へて居た。——自分が醜いから女に愛される事がない、だから戀愛も出来ないんだそれで戀愛はしない、戀愛をするのは不道徳だ、戀愛程不道徳なものはない。と固く心に意識して居る

譯でもなからうが、今迄の過去が自然彼の人生觀をそんな風に作つて行つたのではなからうか。愛すると云ふ事が悪い事である筈がない、それが女を愛するが故に不可ない、不道德だと蔑まれる理はない筈だ。兎角自分を肯定して、Kの態度を誤りである様にと理窟付けて行かうとして居た。自分を肯定しては見ても、其所に或腹立たしさのあるのを何うする事も出来なかつた。

「お前の様な惡魔的な奴とは絶交する」と云つたKの言葉は、彼には生れて始めて受けた侮辱の様に思へた。斯様な侮辱の言葉を受けた以上、肉体的に報復してやつてもいいのではなからうか。あの頬桁に鐵拳を與へたつていいのではなからうか。併し夫では喧嘩になる。中學生ではなし、此の年になつて喧嘩なんて馬鹿げた事だ、然らばやはり絶交するより仕方はあるまい。彼に對しては斷じて沈黙を固執しよう。Kにすればあんな冗談で言つた事を眞に受けて本當に怒つて居ると思ふかも知れないが、さう思はれてもいい、絶交すると云はれたから絶交したんだとさう思へばいい。

彼は電車を降りると郊外の野道を歩いて歸つた。Kの言葉に、腦天から叩きのめされた様に何時迄も思へて、がん／＼する頭を何うしようもなかつた。小學校の校庭を横切つて歸つて行くと、今日も相違らず青年達が野球をしてゐた。春夫を見て會釋する者もあつたが、春夫にはそれに對して返禮するのさへ嫌だつた。黙々として伏向いて歩いてゆくと、頭がとても重くて、足がひよ／＼してゐる様に思へてならなかつた。

彼の家は郊外のその小さな町にある呉服屋であつた。さう大きい家ではなかつたが、古店だけにぢんまりとした家は氣持よく見られるのだつた。

元來、口數の少い春夫はくだらない世間話をするのが殊の他嫌ひであつた。何事をも理窟付けて考へる癖があつて、取るに足らぬ世間話をして、それが何の利益があるか、詰らぬ事を喋舌る間に何か仕事をしたらいゝではないか、思つた事、知つた事をすべて話してしまはねば氣がすまぬ彼の母が殊に嫌ひだつた。何處からか、一つ話を聞いて來れば必

す十人にはそれを自分が實際見たかの様に吹聴する母であつた。

むしやくしやしてゐる爲に、夕飯の時には母が例のお喋りで何やかと話しかけて來るのだつたが、堅く口を噤んで、何一つ答へなかつた。ぶくつと膨れた様にしてゐる春夫を見て、父も生意氣な奴だと思つたか何時もの癖で

「春夫、お前お母さんを馬鹿にする氣か」

と怒鳴りつけた。春夫は大きな聲を出して怒つた父の顔が瞬間、お茶碗の中に映つて見えたが、不相變、何も聞えなかつたかの様に、お茶を拾つてゐた。母は、

「ほんとに春夫は、直ぐ私を馬鹿にして。私口惜しくて。こんな子供は折角骨折つて育てゝやつても、大きくなつたら私達を蛇度見向きもしない様な親不孝者になりますよ。なまじ學校にやれば直ぐこんなになるし、學校にはやらない方がよかつた。學校へ行けば行く程悪くなるんだらう……」

元舌に喋り續けた。之につられて父の怒りもひどくなつたらしかつた。春夫が何處を風が吹くと云ふ様に飯を食つてゐるのを見ると今にも怒りつばい父の平手が春夫の頬に飛んでゆきはしないかと、春夫の傍に居る妹の美紗子は氣が氣でなかつた。何うして兄は何時もこんなんだらう、と思ふと何時も乍ら自分の兄の掴み所のない心が、齒痒いともなるとも云ひ様のないものであつた。

「馬鹿つ！」

父は遂々空になつた飯碗を春夫の額に投げつけたのだつた。春夫は瞬間痛さを感じて頭へ一寸觸つて見たが、顔色一つ變へずしぶいと立つてその儘、外に出て行つた。

川風の吹き上げる堤は殊に氣持がよかつた。飄々乎として一生を旅に暮した芭蕉の事どもを考へつゝ、つい先刻の事は頭の何處にも残さないで、長い間その堤を歩いてゐた。煙草をたて續けに吹かし乍ら、靜に暮れゆく山々の姿を眼を

細くして眺めてゐると、何か知ら此の世にも味のあるものが感じられる、友達から絶交すると迄云はれた屈辱も何うや薄れて行つた。そして今日始めての氣持のよい深呼吸をする事が出来たのたつた。

勉強部屋に入つて行くと、美紗子が彼の隣の机で今迄勉強してゐたらしい眼を上げて春夫を見上げた。その眼には同情を寄せてゐる溫かな潤ほひがあつた。

春夫は久しい間机に頬杖を突いて戸外の黒闇を眺めてゐた。兄の心を計り兼ねて美紗子が時々ちらと春夫の顔を覗いては、又書物を讀み續けてゐる。長い時間がその儘の姿勢で過ぎて行つた。ぼんやりした様に兄の姿が美紗子には何うにも氣になつて、何か知ら話掛け度いけれど、話かけたら又何時もの様に叱られるだらうと思つて、押へてゐた心を、今は何うにも抑へ切れずに、

「お兄さんは、何うしてそんななの？」

と細い聲で囁いた。春夫は相變らずの状態で、

「家に來てゐるのは祖母さんか。」

と、全く案外の返事をした。さう云はれて見ると、母の何だか怒つた様な聲と唄れた聲とが小さく激んで聞えて來るのだつた。

「さうらしいね。又お金貰ひにでせう」

と美紗子は答へたが、もう春夫はそれには答へようとしなかつた。

「よくも又十圓なんて云つて來られたものだ」

「だつて幸夫の月謝ぢやないか。お前夫位の金出して呉れたつてよささうなものぢやないか。お前を小さい時から育てゝ來た母親だよ。困つてゐる時の母親を見て見ぬふりして、しやあ／＼してゐる子供が何處にあるか。世間でだつてお

前の事をさうよくは云ひはすまいから……」

「何、云ふんです。幸夫なんか學校にやらねばいゝんですよ。第一。全家には一文だつて金は無いんですからね。……
…へん、小さい時から育てゝ來たものないもんだ。私達は勘當されてから、どんなに苦勞したか知りますまい。まだあの
時の事を思へばあなたは結構なものですよ、全く私達は、二、三年はまるで乞食だつたんですからね。一週間も水許り
飲んでさ。ずい分、あなたには苦しめられてゐるんですからね。……」

春夫の母と、祖母とはそんな口争ひをしてゐた。祖母が嫁いで來た頃は、此の家は他の町にも方々に支店がある程で
裕福な呉服商であつた。その家に育つた母は我儘一方であつたが、貧しい百姓の父と驅落した爲に勘當されて、大阪神
戸で全く乞食の生活をしなければならなかつたのだつたが、元來氣の強い父母二人はあらゆる艱苦と戰つて遂に今日の
産をなして、故郷へ歸つて見ると、母の生家は祖父の道樂の爲に、零落して、他の町の支店は勿論の事、此の家も既に
人手に渡らうとしてゐた所をやつと、父が努力して買ひ取り、祖母の爲には小さな家を、此處より二、三丁の所に建て
ゝやつたのだつた。祖母の末子の幸夫は中學三年になるのだが、一切の負擔は此の家より出してゐるのであつた。

「お兄さん、お祖母さんは又 金黃ひに來たのね。お母さんもあんなに喧しく云はないで、あつさり上げたらいゝの
に。」

聞耳を立てゝゐた顔を上げて、兄の方に向つて、美紗子はかう云つた。春夫は尙沈黙した儘外を眺めてゐた。

外には虫の聲がひつきりなしにして、時々汚い蛾が電氣の光を慕つて舞ひ込んで來た。涼しい風が入つて、青桐の葉
を揺つて行つた。白い下膨れのした兄の顔を、ぢつと見つめてゐると、妙に、快感が胸に湧くのを美紗子は何う解釋の
仕様もなかつた。自分には何一つ親切な振をした事もなく、優しい言葉一つかけて呉れた事のない兄で、兄に就ての思

ひ出はすべて自分を擲つたり蹴つたりした事のみではあつたが、此の兄が美紗子にはかけがへのない唯一人の者であつた。父にしても母にしても、誰それと友達の名を舉げて見ても、美紗子に取ては、此の兄に比べると他の人達は何でもあり得なかつた。何時もいぢめられて許り居る兄の何處がそんなに自分の心を引くのであらうかと、幾度か考へては見ただが、理窟では何うしようもないもので、兄の顔を見てゐれば、何か知ら兄が好きで堪らなくなるのであつた。よく父から叱られる兄ではあつた。何時の場合にしたつて、兄が叱られるのは尤もな原因からである様ではあつたが、美紗子にして見れば、兄よりも父母の方が何時も悪い様な氣がした。今日にしても、手荒な父が茶碗を春夫の額に投げつけた時には思はず立つて、自分が兄の身代りにその茶碗を投げつけて貰ひたかつた程だつた。謠もせずにいと外に出て行つた儘二時間餘りも歸つて來ない兄の身を思ふと、後片附けをして居ても、何だか氣がそわ／＼してならなかつたし、父母が兄の事をあれこれ悪評する聲を聞いてゐては、兄の爲に何か抗辯してやり度い氣も起りはしたが、さて兄の此の氣持を何う云つて聞かせたつて、金輪際分る筈の父母ではないと思ふと、つい何も云ふ事は出來ず、胸に熱苦しいものを押さへた儘、ぢつと聽いて居るより仕方がなかつた。

一家が、父母と子供と二つに分れて行くのが美紗子にはまざ／＼と見えてゐた。父母がどんな優しい事をしようと、最早、兄と自分との心は、父母から遠く去つて何うもしようのない障壁が拵へられてゐた。何時の間に之丈の距りが、――それは底知れぬ深い穴の様な氣がするのであるが――出來たのかは分らぬが、僅かに父母と自分達とを結んで居るのは、道徳と因襲である様に思はれた。

まだ母と祖母との争ひは聞えて居た。饒舌な母が祖母を捲し立てゝゐる様が目撃してゐる様にはつきりと眼に浮んで見える。

「子供の前であんな親子喧嘩をして。美紗子、よく覺えて置くんぞ。お前が大きくなつたらお母さんをあんな風にい

ちめてやるんだ。いゝかい。」

徐ろに顔をこちらに向けた春夫がかう云た。やつと口を開いた兄を見て、美紗子は靜かに微笑んで見せた。

「えゝ、よく覺えとくね。」

心持首をかしげて、左の肩を一寸ゆがめて兄を見上げた。雨眼には最早薄いヴェールが掛つて居る様だつた。長い綺麗な睫毛が、細目に開いた瞳を隠して、ぼやけて見えた。

「うん、美紗子も親不孝だな。」

かう立つて靜かに立上ると、美紗子の前の机に腰を下した。坐つてゐる美紗子の頭が腹の邊りにあつて、髪匂ひがぶんとした。急に此の妹に對して愛情が、堰き上げて來るのは春夫は全身に感じた。

眼の前に兄の大きな体を見て、美紗子は、頼もしいと云ふより一寸變つた壓迫と、自分の全身で体當りをして見たい様な變な衝動とを感じた。譯の分らぬ兄の態度が、美紗子の心をすつかり引き付けて放さなかつた。

「お兄さんは、何うして、そんなんでせうね。」

と低い聲で呟いた。

「馬鹿云ふんぢやなら」

と春夫は美紗子の髪に觸り乍ら、別人の様な聲でおつとり云つた。

「兄さんがしつかりして居て呉れたら。」

お美紗子自身にも自分が何を云つてゐるのか分らなかつた。

「馬鹿云ふな。」

春夫は我ともなく美紗子の頭を擲つた。

「まあ。」

と云つて美紗子はわつと兄の膝の上に泣き伏した。堪へてゐた涙がひつきりなしに湧いて来る。甘い涙が頬を傳ひ、口へ鼻へ一杯に流れ込んで、兄の膝にじつとりと泌み込んで行つた。此の涙が、自分の愛情を兄へ傳へる唯一のものの様な氣がして、唯もう泣く事が嬉しかつた。何時迄も何時迄もかうして泣いて居たかつた。

「なくな、もう泣くのは止める。」

暫らく經つて、春夫は美紗子の頭を両手で擡げた。美紗子は笑つてゐた。晴れやかな笑ひがにんわりと顔全体に擴つてゐた。

「泣く奴があるか。」

春夫は涙に濡れた兩頬を両手で挟んで見た。涙で洗はれた妹の顔が、可愛くて堪らなく感じられた。此の涙を全部吸ひつくしてしまひ度い様な氣がした。両手で頬の肉を握つて見た。お多福が出来た。眼が細くなつて澁面が出来た。顎をしゃくつて見た。鼻をつまんで見た。美紗子の顔を色々觸つて見る事が春夫には云ひ知れぬ快感を與へるのだつた。

美紗子も、それが快かつた。ひどく頬をつまゝれたりして痛くもあつたが、その痛さがとても氣持のよいものであつた。兄のする儘に委せて、全身に快樂を味つてゐた。之が兄の愛情だ。兄は自分をこんなに愛して呉れてゐるのだ。自分が兄を愛すると同じ位自分を愛して呉れてゐるのだ。自分が兄なくしては一日も生きてゐられないと同様兄も自分なくしては一日も生きてゐられないんだ。兄と自分とは固く結ばれてゐるんだ。さう感じて來ると妙に嬉しくなつて涙と共に顔一杯で笑つて見せた。

突然のその笑ひ顔に春夫もびつくりした。が、美紗子の顔に漲つてゐる自分への愛情を見て取ると、もう一遍、ひどく兩頬の肉を強くつまんで、

「ワツハツ、……」

と大聲で笑つた。何か知ら嬉しくて堪らなくなつたのだ。近頃すい分稀な笑ひであつた。何もかも吹つ飛んでしまふ様な笑ひが暫らく續いた。その笑ひが終る頃、美紗子は何だか恥かしくなつて、ぼつと顔を染めてうつ向いた。

遠くの方を郊外電車が走つてゐるのが見えた。ポーツ、ポーツと云ふ警笛は旅人の旅愁を唆る港町の汽船の警笛の様で、長く尾を引いて闇の中に溶け込んで聞えて來た。虫は相變らず鳴いてゐる。蛙の聲も、風の音も、夜更けの闇に聞えてゐる。祖母は歸つたらしい。母の饒舌が聞えなくなつた。父は何處かへ出て行つてまだ歸つて來ぬらしい。

春夫は窓に腰を下して睨くなつた夜を眺めてゐた。美紗子は兄の寢床も敷いてやつて蚊帳を吊つてゐた。

「お兄さん、もう睨いから寝ませう。」

寢着に着換乍ら、まだ闇を見つめてゐる兄に向つて言つた。

「うん。」

春夫は窓を閉めて、着換へをした。暗い室に美紗子の甘い囁きの様な寢息が何時迄も隣りの寢床にしてゐた。

「明日と云ふ日がなけりやいゝに。」

獨り言ともなく、春夫が靜かに言つた。美紗子には何と言つたのか聞き取れなかつた。

「なあに？お兄さん。」

併し春夫の返事はなかつた。

「何か仰云つたのぢやなかつたの？」

返事の代りに春夫は寢返りを打つて、向ふの壁の方を向いてしまつた。それ切り二人は黙つてしまつた。そして眠つてしまつた。 六月四日（完）